紫宋書解説

後附

ワ 3
6326
3上

子孫永保
共二巻
雲井家
百記

去水五味均平蔵

装束要領鈔後附

女官

女房の衣裳并番掛乃次第古今相違の事

女房の衣裳古今の記録異同ありていろ〳〵今のやう各別なり〻其拠の次第も亦相違せり往古来今事物乃沿革此一事のみにあらず時世小流にかくれなくく此乃ごとき乃ハ宜季にゝうの拙語ゝ乃女房乃衣裳ゝ乃ごとき乃ハ

ク3
6326
3

さてまたうちをかさねて今のかるひとかるくして
畫工も色をあやまりいまはめ〳〵とにうけ〳〵いまは
ゆ〳〵へにいろうなくして唐衣をうへにかさねて
足及〳〵ばれ袴（ウチキ）といつるハ身に着る人の服にて
衣〳〵といつる色なりけ袴の下にハ單うへハ打衣
をうかさねて表着と着くるひ〳〵て袴を着〳〵
ゆひ〳〵をうかさねて裳を付うへ
着袴の次第かくのごとく其中かさねてハ
禁色ハ衣目ひり色をうさしるる上らうハ女房ハ例乃

唐衣ひろいろ乃唐衣ハ地をうハ裳うをハをつ〳〵
〳〵て藤芳なとハ織物かり衣ゆりぬをハ白ひ蔦
ハ織物のかるさぬうをハゆりて表ひつるの事也
常ハ唐うもんの色ハ深乃唐衣ハ唐うもんかるねも
袴りぬさ豊ハ事なりと古記ハ見えうハ織物を
ハ鶴ハ上蔦まてゆりて中鶴ハ不ハゆりを伝ひ
文色いゆ〳〵色ハ赤ひくうさまるまも見て紅花ある
衣ハ赤ハ赤ひて文と月ハらる（松重ハ松のもやう 蔦ハ蔦のもやうハ花の数なり）
うれとも主人乃うハ花うさぬ乃ハ二重織物乃

うしろへさけり又小掛と云る。さえハりうおもしいぬ
うちきハかゝて是ハかさぬの代ふうへまきるもの
なりうち小掛まかゝさぬうさぬる例なしといへり
唐衣裳まて一具きるを物の具と云り假令男
官の束帯のことし唐衣裳なとを略して小掛
着るは衣冠乃ことし指貫くハ表さぬ乃うへに
裳唐衣着る例もありとみえしかりそもく後世物の
具の着やうハ先身ま小袖白を着てうり袴板引と
着し次小草次ま五ツ衣（単と下にして一ツまさら合せり）次まうりきぬ次小

唐衣或小掛（さるをかへハかゝさぬハ着さるなり各着かさぬる／やうし上にさるハ次第まとめうるとやうにあしらゐあり）次小
裳をつけたり是ハ皆着やうハ小袖を着初し上ま梨
古今相違あり凡小袖ハ永禄已来の事成けるとや
今世物具の次第　付故実
○小袖白つまみことし是いましへハ着せられさりし也
○又衣是ハ以前し袷乃重掛（カサネウチキ）なるへし或ハかさねぬ附も
ありり時宜まよるへしあるにいつる又衣ハおゑて何色
あくと色同し色なる又つりの孫てうるハ一つく紅の
平絹を付たり（小つまもそて袖口に各きる入たり是を夏冬通してうらひらくハ不審なり）又

いろ〳〵にて又つゐ〳〵別いろなるもたりかさゝ袴
玉に袋をうゝぬやうにうきめるゆ古来の有識ゆゑひ
なりと形りぬ袋うゝりの袴ハ裏ハ右儀乃ゆゑひ浮ふ
裏〳〵又つゐ〳〵同〳〵さぬ乃袴ハ文も皆おゆ〳〵さも也
袋かゝりにて名ゆゑ袴なゝハ文ゆゑ〳〵れ名ゆ
ゆゑ〳〵ふ也〳〵さぬのもさ女房の官位〳〵りて長短
ありや女官餝抄〳〵ハさぬの〳〵け八尺九寸と見て〳〵り
又雅すけ裝束抄ハ下仕乃衣ハもさ五尺五寸袖くち
二尺一寸と見て〳〵れ〳〵も今世の屋〳〵ハもゝ〳〵と

○むと人ハ袋をゝふひゝと色なるゆ所よかゆ〳〵ゝと
ひわるなり但袋ハ板引袋ハゝり〳〵むと人にて又衣の
下に見せ〳〵なり
○打衣紅乃あやとおてかさゝらを稚人ハ濃打なり
袋をにか、さゝに引つゝらふ袴又つさぬ乃ゆ人て
かさゝらを色ゆ〳〵ゝ今の世にハ畧せらるゝ乃ゝを
濃打とハ布式紅乃濃なゝ〳〵ゝ後世ハ〳〵ゝ深ゝ
をゝなゝゝらゝさぬハさぬのゝけゝゝ六七すゝゝ
紅〳〵雅すけ裝束抄〳〵乃ゝ〳〵

○うちきは上臈小上臈は織物にて中下臈は織物
綾を著るなり衣ばかりばかりけも神にをみ〳〵く
をめらるゝ〳〵ばかりなり
○かゝるあはうちきのうへにかさねるをうちきさぬ
なり枕ぞうしにめもおのまゝにふれさるやうにするそかゝ
るあはうちきにさるといひめとゝるゝ雅すを紫
抄よかゝるあはひもとのゆるゝゝれを
なるゆくゝをまきあふとむをひて六をちも八すち
もしてかゝるあはおほくひのうへうゝうへよ付

ゝりをゝるゝしれとも今の世ハ初をゝりたゝみを
子細あり小又書受ゝるゝ乃かゝるあはゆるめ人ハ
著ゝるまゝなりゝ後とも古昔より女孺（ニョジュ）ハ書記唐衣
とゝるかり平絹おもいくゝゝるゝゆゝるや
○小袿（コウチキ）ハ唐衣の代ゝ著るゝなり台記ゝ久安六年四月
十九日先日高陽院傳ゝ宣系大后語日唐衣を著ゝ
小袿を著ゝ小袿を著てかゝるゝを著ゝ色礼
なりとの給ひ又衣（キヌ）単（ヒトヘ）打衣（ウチキヌ）表著（ウハキ）張袴（ハリハカマ）著ゝく
裳唐衣小袿を著ゝるゝ事もゝゝゝ桃花禅門

のまち抄ニハ小袖と記シ候ハ袖と結て

○紅ノ袴ハ袴ハいまハ袴ハ仕雅すを紫末抄

にハ袴ハ袴ハ袴ハ九尺ハ袴ハ袴ハ

おとかき人ハ袴ハ袴ハ袴ハ袴ハ袴ハ

ハ袴ハ袴ハ袴ハ袴ハ袴ハ

○裳白羅の裳地摺乃裳下濃裳纈纈裳目染裳

いろ〳〵西宮記ハ乃袴ハ袴ハ袴ハ今乃世ハ袴ハ

裳の中に纈纈と袴ハ袴ハ袴ハ袴ハ袴ハ

子細ハ袴ハ袴ハ袴ハ乃纈纈と袴ハ袴ハ袴ハ

の事なり雌結雄結ありて纈と纈と別なるの延喜

縫殿寮式ニハ袴ハ袴ハ衣服令義解ハ五色の交絲以纈

乃文を袴ハ袴ハ和名抄ハ纈ハ帛を結て文様を

孫愼曰繒の夾花ある袴ハ袴ハ袴ハ袴ハ纈纈ハ裳ハ袴ハ

らそかゝるあめをするなり君ハ袴ハ色の地をて里

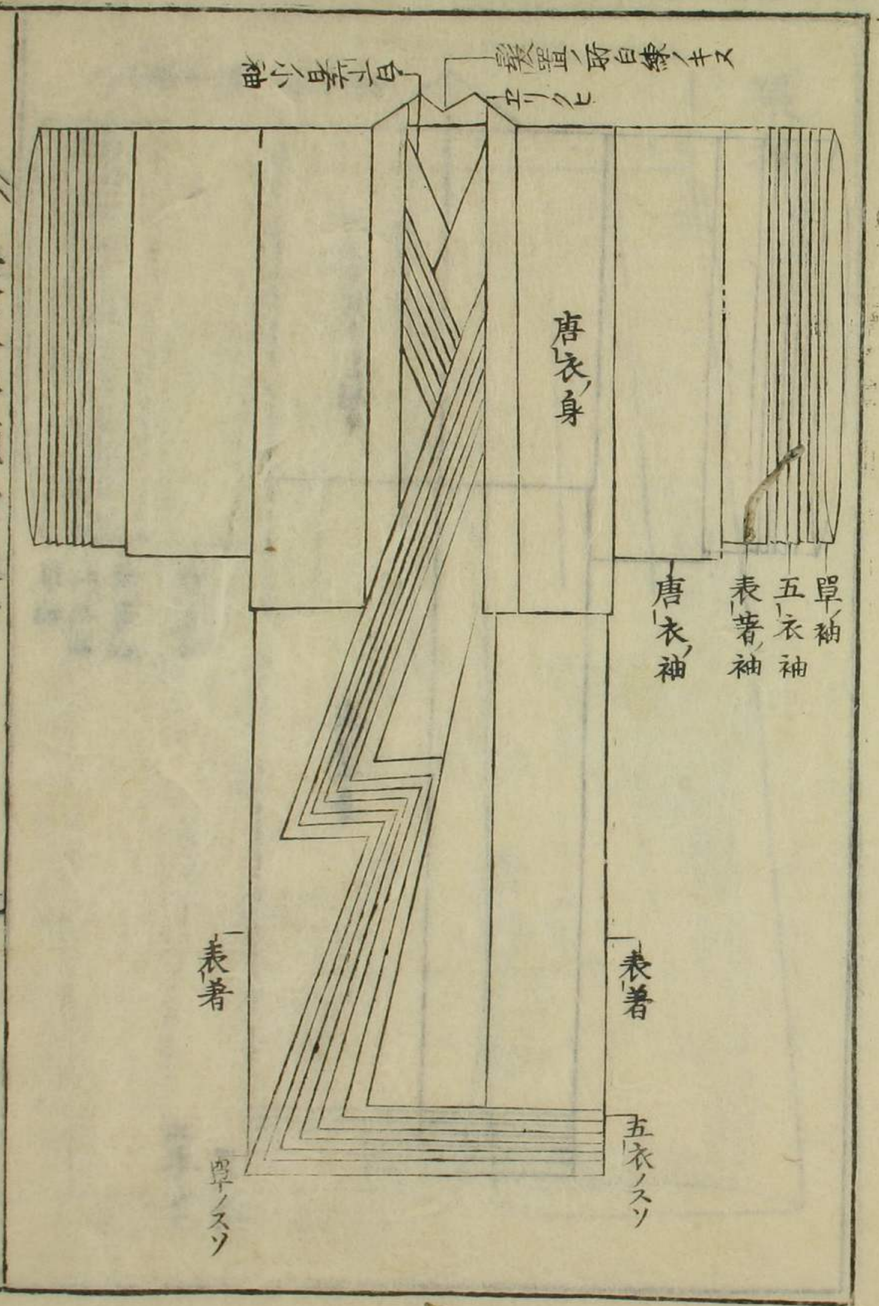
染ハ袴ハ袴ハ袴ハ袴ハ裳乃長短も人ハ袴ハ袴ハ

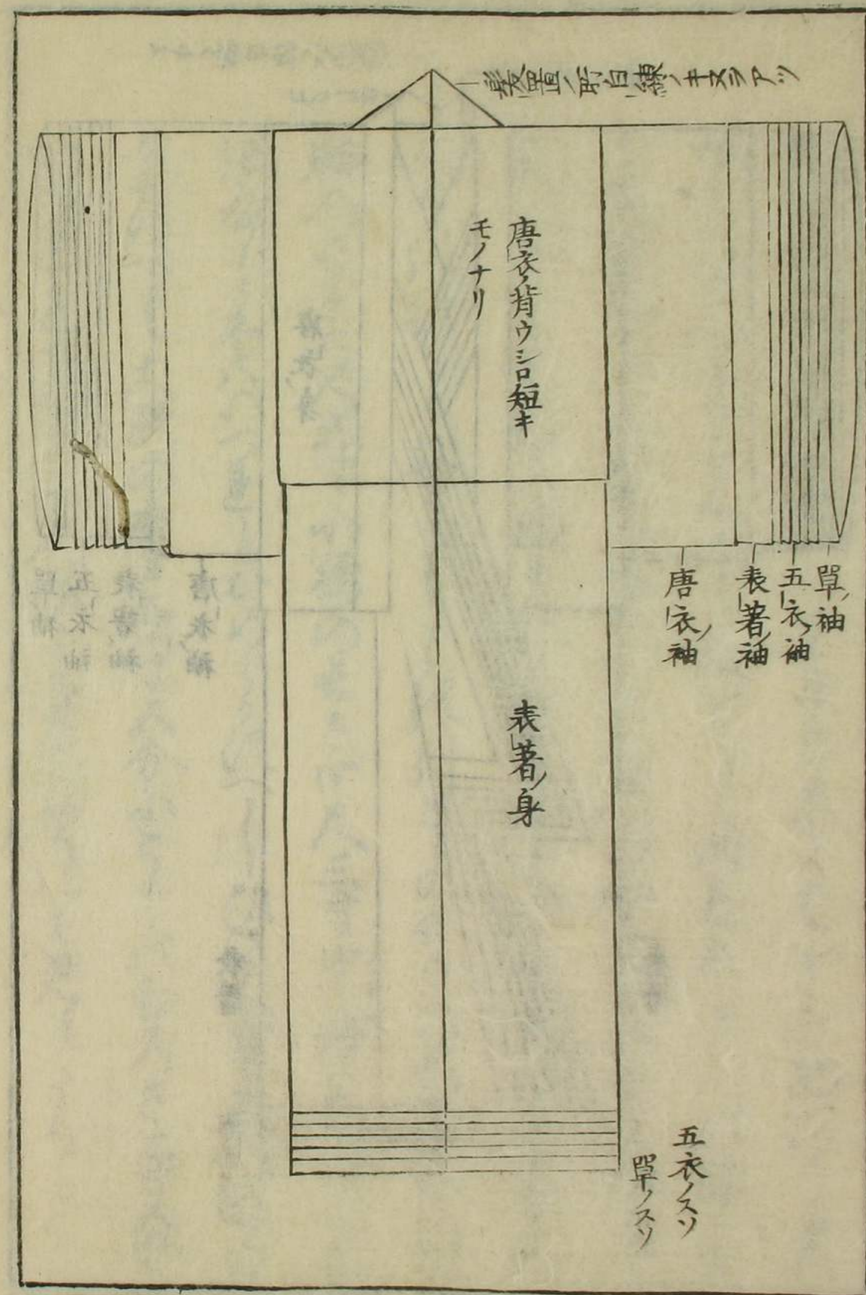
差別ありや女房裝束抄ニ裳のあ袴ハ袴ハ袴ハ袴ハ

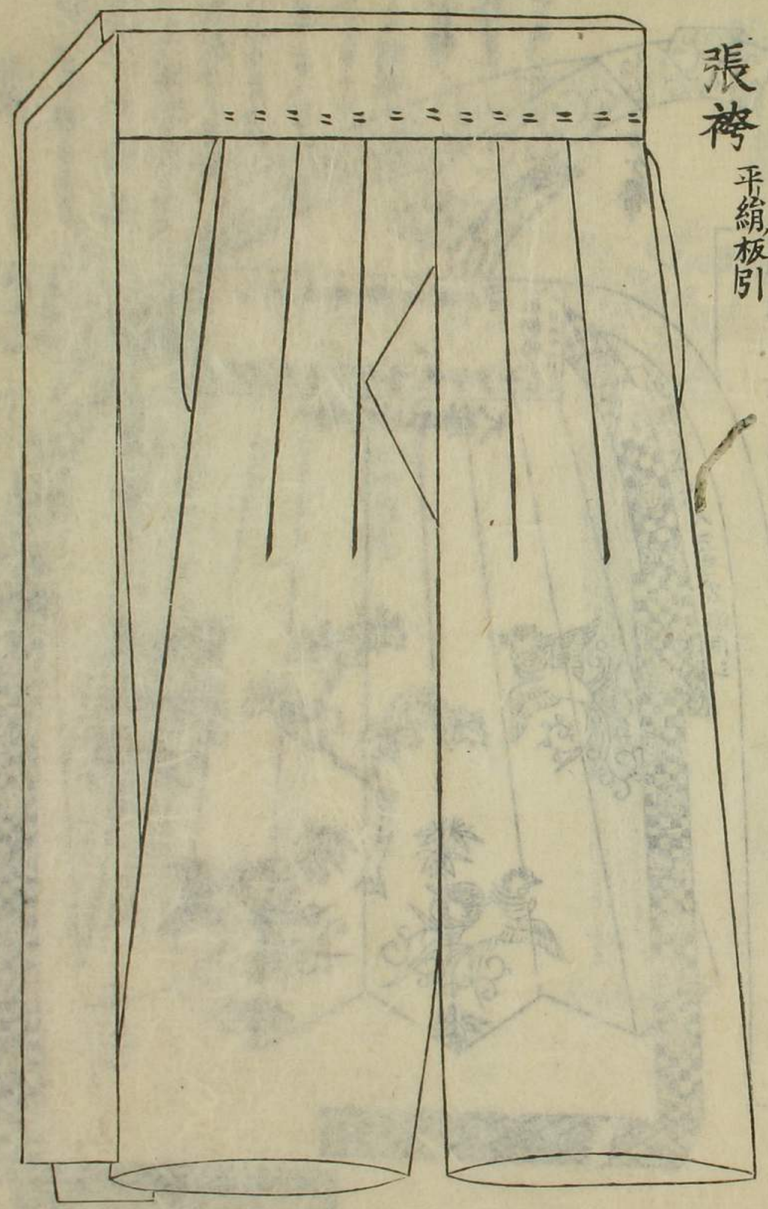
あ引袴ハ袴ハ袴ハ袴ハ袴ハ袴ハ袴ハ袴ハ小

う袴ハ袴ハ袴ハ袴ハ袴ハ袴ハ袴ハ袴ハ袴ハ

出〳〵う袍をする也いつまゝあを糸にて をさ袍にて 文
ゆりたゝ人〳〵まうもんのうへぬをきる時を大こう引腰を
う紀織袍うゝハ文もんの只乃あや文ちゝさうゝ〳〵し
文ハ生乃うゝさゝ乃袍それも文もんゝ文乃うゝ袍を大
こう〳〵袴うゝハやう〳〵ゝ袍それ引こうの長さ六尺五寸おゆ
腰乃長さ二尺五寸小袴の長さ宮尺三寸中倍（ナカベ）ハ袴もゝと
袴乃〳〵各ハいつまゝおめうゝ〳〵ひゝ人〳〵裳文ひゝう
うゝめ〳〵〳〵大腰の廣さ宮寸分小うゝ袴ゝ袴乃さ二寸分
いつまゝをうハゝ〳〵乃ひ〳〵ゝをゝ乃ゝ乃ゝ




唐衣背ウシロ短キモノナリ
表著身
唐衣袖
表著袖
五衣袖
單袖
五衣ノスソ
單ノスソ


張袴
平絹板引

裳

小腰左右ヲ脇ノ下ヨリ前ヘハシテ本ノ帯ノ結目ノ上ニ諸鈎ニ結テ下リタルヲ取合テ平緒ヲカヘスマワニカヘシテ下帯ニカヘシテスルカヨキナリ下リハ諸鈎ニ大方腰ノ長サニシテ下ル

カケ帯

子リクリノ糸ヲ以テ此上ニ置文アリ左右同シ

小腰長サ四尺三寸弘サ二寸五分左右同シ

引腰ニ長サ六尺五寸左右同シ

弘四寸五分

袙扇

板數三十九枚

惣地金銀妻紅

金物蝶鳥

右ニ同シ

紫 白 紅 薄紫 黄 萠黄

○いろ〳〵の衣裳かさね色目の事

春冬の衣いろ〳〵（是より以下桃華禅閤の女官餝抄の抜萃なり）

○皆紅のかさね　くれなゐのひとへ（単はさぬのうへに是も余皆准之）

白ちりめん（表著は衣のうへ是も余准之）　松重の小袿（小袿は表著のうへ是も余准之）

○紅ふりひの衣　うへくまのあふぎ　あをいろの衣

をんなのうちき　あらいろのふうちき

○紅のうちやう　うへくれなゐ丹よ　白ちりめん　ちらさひとへ

白ちりめん　あひそめの小袿

ちらし表着　くまをかの丹の表と紫

○むらさきほひ　うへむらさきに　薄はなだとかさね

うへ山吹のうちき

○むらさきのうちやう　うへはふよ　白ちりめん　白ちりめん

菊萎の小うちき

くまを丹のむとへ

紅梅の小うちき

○梅のきぬ　おなじくちろ　すちのひとへ色

ちりめん　いろのこうちき

○はなだ紅梅　おなじく紅梅　あをちのひとへ

白ちりめん　あひそめの小袿

○裏はなだ紅梅　おなじくこうこいい　まちのうへ色ひとへ

ちりめん　あをちの小うちき

○おうてい かさね
　ゑひそめ　うすもの
○紅梅　みほひ　うへ　紅梅　うら　紅梅と言ハ
　もえぎ　うすもの
○唐なし　おりて　ちろく
　うへ　あを
　桜　もえぎの　表
○ほそ　かさね　おりて　ちろく
　うへ　あを　花
　紅梅　うすもの
○やま　山吹　みほひ　山ぶきの　衣　うへ
　黄かさね　衣とかさね

　色　ぬき　の　ひとへ
　もえぎ　ふうちき
　はなだ　むら色
　ゑひそめの　小袿
　色　おうの　ひとへ
　ぬうもの　こうち
　くれな　井の　単
　すそ　ぬ　小うち　花
　あを　花　色

　色　ぬき　の　うへ
○花山吹　おりて　唐衣　紅梅
　うへ　黄　うら
　山吹　乃　表　黄
○裏山ぶき　おりて　黄　紅
　うへ　くれなゐ　あを
　魚陵　乃　うへ　ギョレウ
○紅梅　おりて　すそ　うへ
　うへ　色　あを
　松かさ　の　うへ　花
○ぬき　表　そと
　裏　あと
○菊　うへ　ね　おりて　うへ　紫
　うへ　あと

　色　深　の　ふうちき
　紅梅イ　色　か　井　ひとへ
　あを　花　こうち　花
　白　を　むら　色
　ゑむ　ため　乃　小袿
　青　花　ひとへ
　山吹　の　ふうちき
　今按　単　表　小袿　八乃　次不審
　くれなゐ　乃　ひとへ

うゝ山吹のうちき　　雲うきの乃小うちき

○桜　桜　薄紅　そうう　紅梅　ぬゝ　さ　山ぶき　　くれなゐ紅むとへ

紅梅乃うゝ紅　　色えの紅の小袿

○うへ白さ六　紅の濃薄さ二重　まさこ紅うちき一かさ　薄紅の紅うすさ二重　うへたに七つかさめ　　すちうれうちき

色袴お丹のむとへ

うゝ紅乃小うちき

○白うちきやう　うへもかさを　紅とうすや　　赤乃さ紅むとへ

こうちいのうゝ紅　　くゝなゐの小うちき

○松　うゝ　孫　おりて　柴　　紅乃花ぜ色

を乃さのうゝ紅　　そうのこうちき

○かて　桜　おりてすゝ　うゝあゝ紅　　りゝ紅乃むとへ

柳乃小うち紅

ちゝゝれうちき

○さゝゝ　菊　黄　おりて　崩木　うゝ　ぬ　毛　　くゝなゐ井のひとへ

紅梅のうゝ紅　　すゝゝれ小袿

○ぬひう　紫乃衣　おりてすゝ　うゝ　花田　　紅乃花と色

ちゝ紅れ　表　黄　　こうちいのうちき

此中　梅　紅梅　八十一月　不節　より二月まて　桜　山吹　八

三月　ま　こ　梅　花　三月　宴　ちうちき　ぬいろゝ

附ときこゆるハ四月ハ何にてもこまかなるの
紗綾かたもようハさぬの地をハ唐織物二重織物
又乃おりものあや何にても子細あるまじ夏ハ
常ハおりものをもちゐる事なしそれへ又衣にも非
表中絵つき法服ハ七ツも八ツも又十ツも附にはかなふ
らぬハ只今の人ハ衣より外ハいつとても又うすく
なる衣一ツ単をかさねても用ゆ二三ハかさねても
子細なくいふハ紅小うちきなとハ二重織物又ハ固(カタ)織物
なとも用ゆべからずや

夏乃きしめの衣いろく
○薮かさね　白花きしめのむらく
松かさね乃うら紅　紅の小うちき
○卯の花おもて白うらあをし　白きすゞしの単
色々に表着　こきひそめの小袿
此外乃色くさまざまにあれとも四月中ハ何にても
のかさねてハ単ハ衣更乃むとへくこく精好(セイゴウ)のすゞし
いつもかさねられハ又賀茂祭の日ハきそく乃
又衣をとりちらし事もなし

五月六日より秋までしたさぬのいろく

○あやめぬひとへうすね　表書裏紅梅　すちうのうち紀

二あわ乃小うち紀

○花橘のむとへかさ　表くちなし　裏書　ちはなかうちき

をうちぬこうちき

○かてこぬひとへうすね　表こうこい　裏書　をうち乃表着

紅のこうちき

○萩芳ぬ　後のこうこい　花とへかさ

二ゐわ乃小袿　をみなへしのうち紀

○萩のたて書のむとへうすかさ　ぬさをうちたて書裏もゐをう

すいうぬうち紀　女郎花の小袿

○萩乃むとへかさ　なてをうう書　をみなへしぬうちき

白袴弁の小うちき

○女郎花のひとへかさ　表をうう書　紅のうち紀

あいいろのこうちき

○うぬをうぬむとへかさね　あさすいうのうちき

松かさぬぬ小袿

○紅乃花とへうう孫　二あわ乃表着

くち紅のふうち紙　女帝花のうつし

○二藍はなむらさきかさね

すはうこうちらさ　志ほらさ表着

○ゑひ染のひとへかさね

色袴か丹の小袴　紅のうつし

○ちろさ紅のうへかさね

ふたこの丹はふうち紙

花ゝかさねふうへハすゝしはなぢ織物或ハうすもち綾

下はあやのひとへと紅のうらかさねひらをいと下ゝ綾

平絹のうへ物なゝ紙りうちゑ又綾と伊予ゑゑ染そうて

のちゆるなりあやめうちら花ハ五月中かてこゑ

六月まて女帝花蘇ら紙ゑ紙ゑの舎ちり秋のうちめさ

かゝくゝい表紙（ウハキ）小ふうち紙ハ皆ちゝゝ丹織物或ハ二重

織物をゑ上さ函ハ角ひとゑふなり

九月九日ちり丹きぬいろゝ

○菊をみち又伊の色ゑてゑ又紅すゝにちゝ紙綿

入ゝ月ひいをゑちハめゑいかゝん

十月より霜立節まゝ毎乃きぬいろゝ

○菊乃浦衣（きくのうらぎぬ）　又すはう白し
下三ちろ
あをさひとへ
芙蓉裏のうはさ　表芙蓉
龍膽（リウタン）乃小袿　表すはう
裏青
○紅葉重八　芙色三ツ山吹のこれらすさ一ツ〻〻紅れあさうすれ
一かさね〻をそろう一ツ合八つかさめるなり
くまをかけ乃むとへ
菊乃うちき
芙きくれ小うち袋
○白菊　たりて白ろ
うすはう
紅の花ぎぬ
芙きくの乃うちき
そはうれこうちき
○芙蓉　たりて芙
うすはう
くまなゐの日とへ
白ろさうはさ
あをひ波乃ふうちき

○うすはうひとへ　おりて中ぶ
うすはう
紅乃ひとへ
松重れうれ
あをれ小袿
○芙りみち　おりて芙いろ
うすはう
くまをかれ花とゐ色
すはうのうちき
まきこうちき
○ちゝ紅紫　たりてすはう
芙
多れか丹の単
ちひそめれ表着
すはう乃ふうち衾
○かえて紅紫　表うすはう
芙
藤芳れむとへ
紅乃うはさ
ちひそめのこうちき
ひよれいろ〻はされ　表色れ多乃面に青〻おりぬ

以上後成寺殿下乃法衣のうちより出し給ふ

今按かゝる衣さうゝ附ハ小うちさハりちひらきたいくさ

しく上に出給ふ

ゆゑハ女のたちそくれ事

○かさゝ人ハ童女れうゝ為るもの也さめなり扨さうしに

樅乃ゝさゝ蔦英おうしていなとふうしくかさみなゝく

きりひさてといひ又表ハぽくしぽうゝ反ハ表打紫

ぐちとこいゝ新葉集ゝ無昌ゝ哥

ゆゝ人乃たゝふなる小し女子うかさゝ人乃すそれおうゝさ世

ゝとみくゝり元ゝ袴のなゝさ一丈ゆ尺まゝ

一丈二尺表さのゝてのうちあなゝうゝ下ゝ人と左右の脇乃下

ひくゝてハ二のゝて二尺二すうちゝれ長さ二尺三す

くひゝさハかりゝさゝ乃くゝひのやうにさんかりおほくゝ

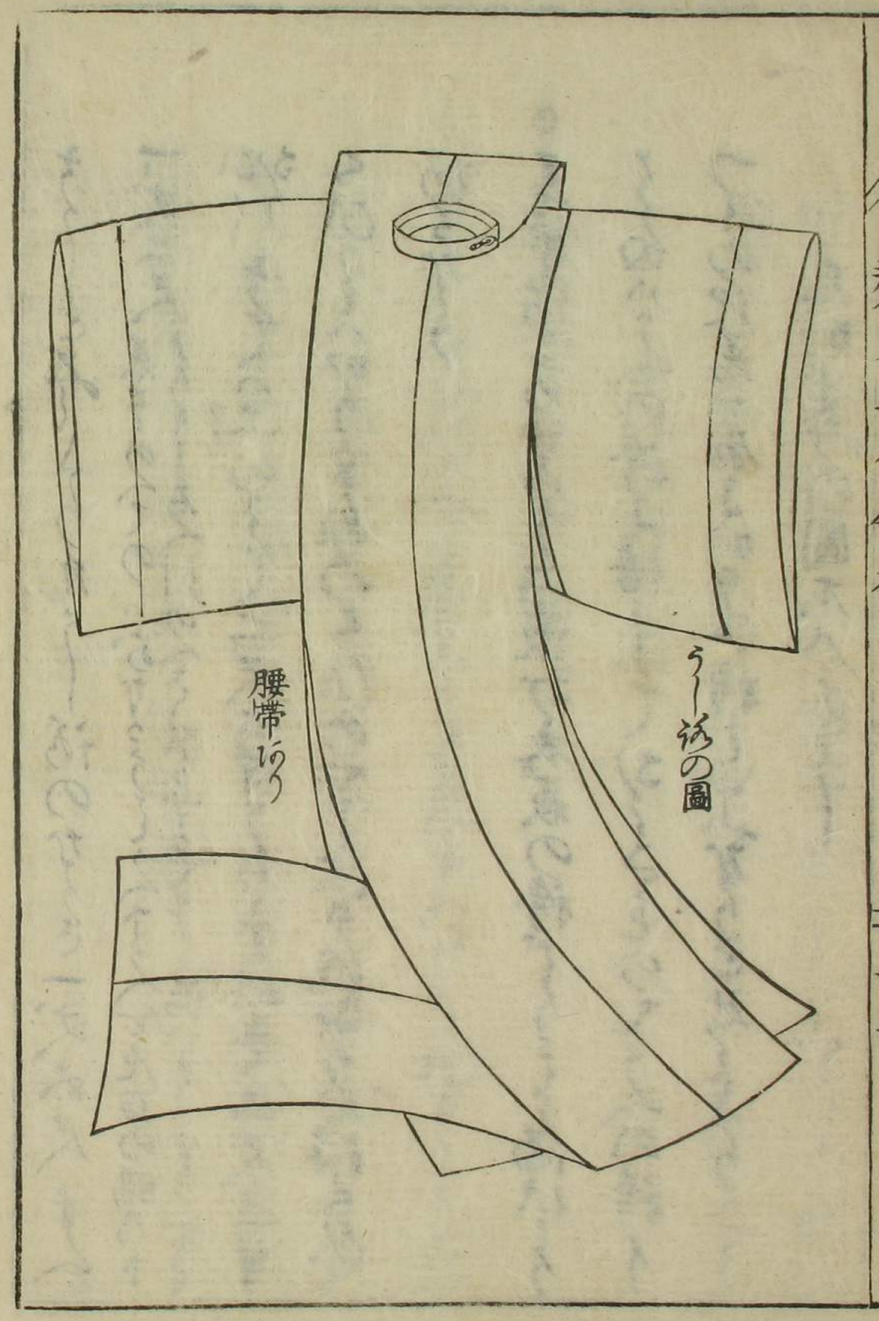
ゆるなり

○書早ゆこめすゝう二濃打衣表の袴ぽうゝ裏ゆ

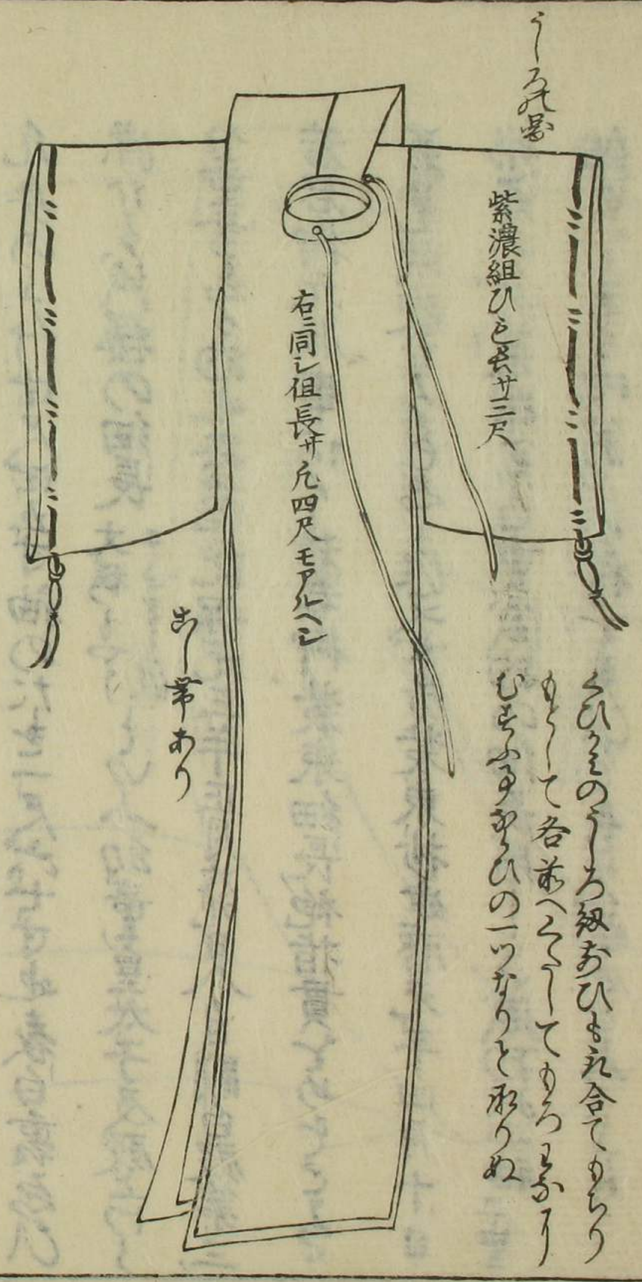
ゝゝ人ハうゝの袴ゝ倍して表ゝさものゝうゝの袴ゝ

つゝゆ元表乃裏ゝかさゝ袴とゝふなりさゝ元ゝうゝ

元かさゝみの圖左乃ゝ



○細長ハ狩衣のくひ[illegible]ひろ[illegible]ひろ[illegible]三ところ[illegible]ひろの袖ひろ
凡身のたけ四尺五寸袖のたき一尺六七寸也表白裏色ハ
深なる紅梅の細長文様もやうさまざまとゝ[illegible]幼童皇太子及殿上ひろ
ハ童女なる物也兵範記保元三年正月廿九日今日關白殿第三
若君御元服事ひろ若君御裝束細長袍指貫とめてとゝ
若君元服なるもとゝ[illegible]又女房裝束抄建暦元年四月十日
姫君の真菜姫宮白重織物の細長同[illegible]織物小袖二重
細長と有る付あこめ袴を用ひを是先例也と凡[illegible]ひろ
凡細長乃圖左乃ごとし



師説曰或人問細長ハ御産衣あと用ひ給ふ屋うに
形りぬ給ふ小曰ちをいた委子細を已おそ〜ろ
ちをへ給ふ儀ふ〜を蓋元永二年或秘記ハ五月廿八日
皇子降誕六月二百の日次日今日第五夜なり院より
御養産乃事ハ威儀御膳献の御衣案二脚宰相
ハ入こ孔を舁件の御衣をこ銀泥をめりこを上て
娘乃洲濱同〜ハ霧亀小松をちく折立ハ亀甲
乃白織物を用ひ下机花足面ハ亀甲ハ織物を
を娘泥絵りてこ亀をめり貝小弓をちく又

鷺あゝの案二脚同しく泥とりて色をめり
皆白銅（ヒロウドウ）乃金物（カナモノ）あり隅角（ヨスミ）に白組総とつを面に白大
文乃薄物を押下絵にかりて小弓等を
めゝ筥一合に八織物乃御衣一襲を納む三重葵乃文唐物と
重め唐物の一合に八綾の御衣一襲を納むさむ三重葵丸文小文と
入帷子乃
かさね入る一合みは綾乃御褻袴（ハツキ）二帖平絹の浅袴
一帖を納む各二幅長一尺入る
又一合色目おみなへし
已上各白織物のつゝにたるむ伏組乃案一脚に二合
伏せる各帕（オホヒ）あり唐物の草なり三幅長一丈三尺白い絹

りて小弓折枝をめゝ第一節調進せりむ花鬘（クハシヒ）
乃義あゝく俗眼のおもゝ所なりとなりとり
あれ仕記に八只織物乃御衣綾丸御衣とのみ
細色とハかゝとも指故実丸人ゝ乃めゝとなり
と形りぬ

嘗聞冠と服のたぐひは神乃代より名づけて人の
代となり漸其位乃ふかきより御て君臣上下
ゑ卑の序をさだめおいさだむ是禮の成なり他乃
國ゐもこれをまねび鳥獸の冠角にのると凡亨冠緩を
はじめ麻絲をおさめ布帛とする絲小衣裳絨
つもれり後世ふるてて貴服賤服各等差をなし
束體して朝ていそれ人の束體冠ゐ冠ゐもこれハ
うやまひれりこれとも其人とのうをして華服を

著述附い是とあるさしむる事和漢ともに仁のそなく
ゝ程〳〵とわさま〳〵ちらばりたんや予いやしくもこれ
故実とおのゝ壺先生の机下にたいして師ゝ述作せられ
る位衣位裝束暗鈔をこゝ学ひおく彼元と世ゝ宿書
に始めくゝ考へたるゝ〳〵ためふ日来講習ちまと
自己のすゝ〳〵記動物と称鼇頭傍註よく〳〵後ゝ女房
裝束乃まを附〳〵の八或尊家ゝ裝束要領鈔と
題名を始めぬ是ゝ先ゝ一名にのりとゝ〳〵ともきのら

乃〳〵損益する所をあるを八書名も亦ゝ改たまり如予
志ゝゝゝゝゝ所あるて止事を得されハ師ゝ再三祈り
ゝ人乃ゝ〳〵まを〳〵ゝ見を恐ゝ今刊版しく
徒ゝ寸心の機臆をゝ〳〵ゝ已

正徳六丙申歳正月上澣　徳田良方